

シーボルト英語の現状と展望

上 村 俊 彦

Siebold English, its Present and Future

Toshihiko UEMURA

1. はじめに

県立長崎シーボルト大学(当時)のカリキュラムは、開学5年目の2004年に大改訂が行われた。国際交流学科の英語プログラムについても大きな変更が加えられた。この新カリキュラムに基づく英語教育は、2005年度入学者から適用され、2009年3月に最初の卒業者を出す予定となっている。本稿では、新英語カリキュラムへの移行の目標や意図を概観するとともに、実際に得られた教育成果の検証や今後の検討課題について考察する。

2. カリキュラムの概略

全学的なカリキュラム見直しに連動して、英語教員グループは国際交流学科英語カリキュラムの大幅な改訂をおこなった。従来の英語科目の改廃や新たな科目の開講により、新英語カリキュラムは「英語基礎科目」群、「言語・コミュニケーションに関する科目」群、「英語専門科目」群の3群構成となった。

開講科目に関する「アカウントビリティ」を高め、明示的な「数値目標」を設定するために、「英語専門科目」群には外部英語試験 TOEIC 試験のスコアに基づく履修要件を定めた。この新カリキュラムによる英語履修は、2008年4月に1年次から4年次までの全学年に適用されることになった。

この英語カリキュラムの主な特徴は、1年次の「英語基礎科目」群の科目を除いた英語科目の多くは、学年指定を廃し、TOEIC 試験スコアを基準とした履修要件による履修となったこと、TOEIC 試験スコア500点を卒業必修英語科目の履修要件としたこと、高度な英語運用能力養成のための科目群を履修要件 TOEIC 試験スコア700点まで開講したことである。

2003年、文部科学省は『「英語が使える日本人」の育成のための行動計画』を策定した。文部科学省は、行動計画の趣旨を『経済・社会等のグローバル化が進展する中、子ども達が21世紀を生き抜くためには、国際的共通語となっている英語のコミュニケーション能力を身に付けることが必要である。』と説明している。この行動計画の中で、文部科学省は中学、高校の英語カリキュラムについてはガイドラインを示しているが、大学については「各大学が、仕事で英語が使える人材を育成する観点から、達成目標を設定」することを求めている。本学科の新しい英語カリキュラムと履修制度は、この要請に応えることができるように制度設計された。

3. TOEIC IP 試験スコア

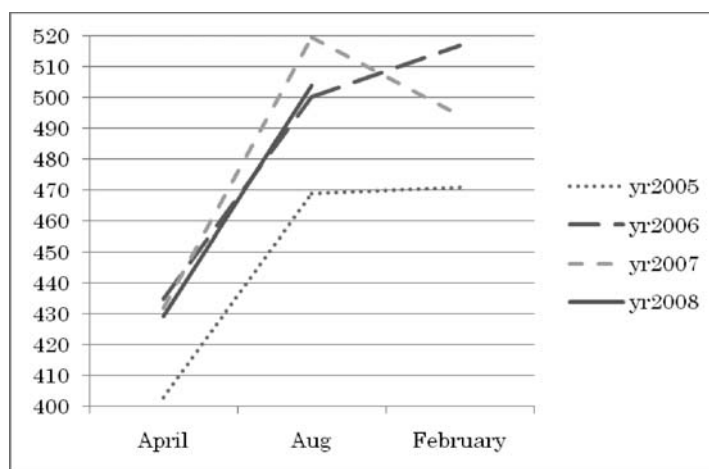
現行カリキュラムは TOEIC 試験スコアと密接に関連づけられている。以下、本学科学生の英語力を、本学で年3回(4月, 8月, 2月)実施している TOEIC IP 試験の成績をもとに概観する。¹⁾

3.1 1年次平均点

グラフ1は、各入学年度の1年次 TOEIC IP 試験スコアの平均点の推移である。2005年度入学者を除く2006~2008年度入学者は、1年次2回目の TOEIC IP 試験で平均点500点以上となった。ちなみに、「TOEIC テスト Data & Analysis 2007」によると、TOEIC IP 試験の過去5年(2003年~2007年)の平均スコアは442点~447点である。

各年度ともに、TOEIC 試験受験が2度目となる8月には平均点が65点~78点と向上している。しかしながら、3度目の2月については、2005年度はほぼ横ばい(+2点)、2006年度は上昇(+16点)、2007年度は下降(-25点)と三者三様の結果となった。1年次後期の英語学習と TOEIC 試験スコアとの関係については、継続的に検証することが必要である。

グラフ1. 1年次平均スコア



3.2 スコア500点以上の学生数

本学科では、TOEIC 試験で500点以上のスコアが必修科目「リーディングII」の履修要件である。²⁾ このスコア要件は、本学科学生にとって卒業のための第一関門となっている。グラフ2は、2005年~2008年度入学者が1年次に受験した TOEIC IP 試験において、スコア500点以上を取得した学生数を実受験者数で割って得られた割合(%)を示したものである。³⁾

グラフ2は、前述のグラフ1と類似した数値変化を示しているが、2008年度入学者の4月・8月成績に着目した場合、グラフ1の平均点は2006年度の、グラフ2の500点以上の比率は2007年度のパターンにより類似している。

グラフ2. スコア500以上の学生比率

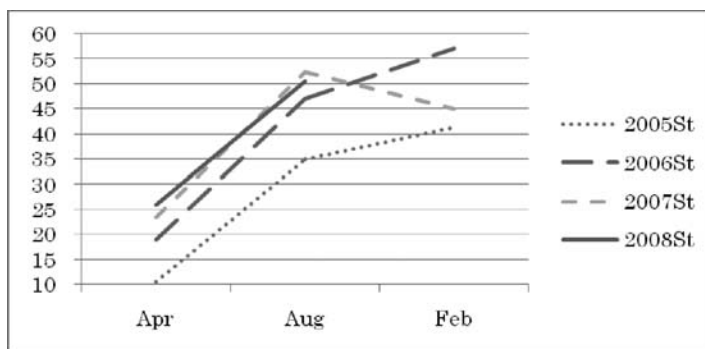


表1. 受験者数(人)

入学年度	Apr	Aug	Feb
2005st	85	80	75
2006st	84	83	77
2007st	85	84	71
2008st	85	81	NA

4. 2006年度入学者と2007年度入学者の比較

本学学生支援課提供の資料（2008年度4月時点）をもとに、2006年度入学者と2007年度入学者の英語科目単位取得状況を比較検討する。また、TOEIC IP 試験（2008年8月実施）をもとに、両入学年度学生を英語担当者ゼミ学生とその他のゼミ学生に分けて両者のスコア比較をおこなう。

4.1 学年次ごとの英語科目単位取得

学生支援課提供による英語科目単位取得状況リストをもとに、本学科入学者の平均英語科目単位取得数を計算すると、2006年度入学者（1年次15単位、2年次10.22単位）、2007年度入学者（1年次15.48単位）であった。本学科の卒業要件単位数は124単位⁴⁾、うち英語科目は22単位（「英語基礎科目」10単位、「英語専門科目」12単位）となっている。多くの学生は、1年次終了時に卒業に要する英語単位数を超える単位を取得しているが、卒業のための英語要件をすべてクリアしているわけではない。

1年次学生の多くは、1年次開講の必修科目「英語基礎科目」（「CALL インテンシブI」、「ベーシック・リーディング」、「基礎英文法」、「オーラル・コミュニケーションI」、「英語発音訓練」、「ベーシック・ライティング」計10単位）を中心として英語単位を取得しているものと考えられる。入学後の英語履修オリエンテーションでは、上記科目と共に英語基礎力養成のために「リーディングI」、「リーディングII」、「英文法」、「CALL インテンシブII」を積極的に履修することを薦めている。表2は、1年次終了時におけるこれら4科目の単位取得率を表す。

表2. 4科目の1年次単位取得率

	入学年度	
	2006年	2007年
リーディング I	72.62%	65.48%
リーディング II	13.10%	16.67%
英文法	54.76%	55.95%
CALL インテンシブII	40.48%	33.33%

「リーディングI」と「リーディングII」の単位取得率を比較すると、前者は7割前後であるのに対して、後者は20%に届いていない。この要因として考えられるのは、履修スコア要件（TOEIC試験スコアが、前者400点以上、後者500点以上）、取得すべき単位数（前者1単位、後者2単位）が充足されていないことである。ちなみに、上記単位取得率は、リーディング系科目を受講せずにTOEIC試験スコアによる「単位認定制度」を利用した場合も加算されている。

後期に開講される「英文法」と「CALL インテンシブII」については、英語の基礎力養成やTOEIC試験対策としても有効であることから、前期の「基礎英文法」、「CALL インテンシブI」の各担当者から履修することが強く薦められているが実際の単位取得率は必ずしも高くない。

表3は、TOEIC試験スコアによる履修制限がある英語科目群の単位取得状況を調査した結果

表3. 英語科目単位取得者数

Score	Class	2006St *	2007St
700	通訳II	0/3	0
	English Seminar II	0/0	0
650	異文化間コミュニケーションII	0/1	1
	Academic Writing	0/4	0
600	ビジネスイングリッシュII	0/3	0
	時事英語	0/3	2
	リーディングIII	0/3	0
550	English Seminar I	3/7	0
	Basic Debate	6/0	7
	通訳 I	7/0	5
	ビジネスイングリッシュI	3/0	3
500	Basic Speech	0/23	0
	Essay Writing	0/29	0
	リーディング II	22/53	28
450	スクリーンイングリッシュ	0/17	9
	インターネット英語	0/5	4
400	リーディングI	61/13	55

* 2006年度入学者の単位取得者数は、1年次/2年次の順で記載。

である。表3のコラム2006St（2006年度入学者）の数値のうち、左側は1年次、右側は2年次における当該科目取得者数を示す。表3のScoreは、履修要件（履修に要するTOEIC試験最低スコア）を示す。

表3の1年次の英語科目履修者数について相関を調べると、2006年度と2007年度の相関係数は $r=0.976$ で、強い相関が認められた。1年在籍時の英語科目履修の傾向は、両者はほぼ同一と考えられる。

2006年度入学者の2年次については、履修要件550点以上の英語科目の単位取得者の数が少ない。Score 550点以上には、徐々に専門性が高まるように英語科目群を配置している。2006年度入学者の多くは、専門英語を学ぶ機会を十分に活用していない。なお、学生支援課提供の2008年度4月履修状況リストによると、2006年度入学者の3年次英語科目の履修登録単位数は、「国際関係コース」（6.67単位）、「文化コミュニケーションコース」（12.82単位）であった。専攻コースの違いが英語科目の登録単位数に反映している。

学生支援課提供データをもとに英語科目履修の傾向を推定すると、1年次には選択必修科目を中心に15単位前後、2年次には卒業要件を満たすためにさらに10単位前後、3年次にはコースにより6単位または12単位前後の履修が行われている。平均的な本学科学生の英語科目履修単位数は31～37単位である。単位数からすると、多くの本学科生は英語を「マイナー・メジャー」として学んでいることになる。

4.2 英語担当者ゼミ学生

TOEIC IP試験は、1年次から3年次8月まで受験することが義務づけられている。英語科目担当の本学専任教員のゼミ学生は、2年次在籍者（2007年度入学者）28名、3年次在籍者（2006年度入学者）39名であった。彼らのうちで2008年8月のTOEIC IP試験を受験した者は、それぞれ20名、25名であった。TOEIC試験スコア平均は、2年次在籍者534.50点、3年次在籍者543.20点で、それぞれの学年平均点485.24点、521.60点よりも高いスコア（2007年度+49.26点、2006年度+21.60点）を示した。ただし、英語科目担当教員のゼミ学生グループのTOEIC試験スコア平均は550点以下で、本来、高度な英語運用能力の育成を目指した上級英語クラス（表3の600点以上の科目群）の履修が不可能である点は、今後検討の余地がある。

なお、英語担当者ゼミ学生の当該TOEIC試験欠席比率は2007年度29%、2006年度36%と比較的に高いことを考慮すると、このスコア結果は参考値にとどめるべきであろう。

5. 「中期計画」の数値目標

「中期計画」では、本学科学生の全員がTOEIC試験スコア600点以上、「文化コミュニケーションコース」の学生全員がTOEIC試験スコア730点以上または同レベルのTOEFLスコア・英検準1級合格、英語に特化した学生はTOEIC試験スコア850点以上または同レベルのTOEFLスコア・英検1級合格を目指すことが明記されている。

実際のTOEIC試験（2008年7月実施）で、受験者の比率（下位者100分比（percentile rank））を調べると、845点以上（92%）、745点以上（80.1%）、595点以上（53.1%）であった。当日の公開試験受験者は、TOEIC Test公式サイトによると67,240名であるから、本学科の学生が受験していたと仮定した場合、「中期計画」でいう「英語に特化した学生」に求められている試験順位は、67,240名中5390位以内、「文化コミュニケーションコース」の全学生は、13,367位以内である。

「中期計画」で英語学習の目標値を高く掲げ、カリキュラムの見直しや授業展開で努力したこと

は評価できるが、やや高邁な数値となっているように思われる。しかしながら、「中期計画」の実現に向かい、英語教員はもとより学科を挙げて学生の英語学習支援をおこなうことで、当初の目標にできるだけ迫ることが肝要である。

ちなみに、2008年に文部科学省の「平成19年度小学校英語活動実施状況調査及び英語教育改善実施状況調査(中学校・高等学校)」によると、文部科学省が『「英語が使える日本人」の育成のための行動計画』で求めた中学生の英語力(英検3級)、高校生(準2級)、英語教員(英検準1級 TOEFL(PBT 550点以上, CBT 213点以上, または TOEIC (730点以上))の達成率は、中学生32.4%, 高校生(国際関係(語学含む)の学科・コース)67.4%, その他の学科・コース29.3%, 中学教員43%, 高校教員78.2%であった。文部科学省の主導による行動計画であったが、目標の完全達成にはほど遠い結果となっている。(詳細は、Appendix 参照。)

6. 改善策

今回の2006年度入学者の英語履修調査では、1, 2年次に TOEIC 試験スコア要件を満たし、上級の英語科目の履修が可能であっても、卒業単位数確保のためにその他の科目履修を優先させるなど、「英語力強化」に資する科目の履修が後回しになる傾向があることが確認できた。この傾向は、現行英語カリキュラムを策定した時の学生の履修予測と、大きくかけ離れている。また、TOEIC 試験スコアを履修要件としたことで、上級の英語力養成を目的とした科目の履修が不可能となっていることも見てきた。このような問題点を解決するために、現行の英語科目履修方法を一部見直すべきである。

TOEIC 試験スコアを履修要件とする現在の履修方法は踏襲するが、現在よりも英語科目履修機会を増やすための方策を提案したい。本学科では、3年次前期から専攻コースによる科目履修が本格化する。従来の TOEIC 試験スコア履修要件にかかわらず、学生のニーズに合った英語科目の履修が可能となるように、2年次終了時の英語取得単位数や一定の関連領域の科目単位取得状況を勘案した新しい履修要件を3年次前期から導入することを提案する。

提案1. 2年次終了時に英語科目30単位を取得した学生は、TOEIC 試験スコア600点相当に達したと見なし、「英語専門科目」の当該科目の履修を認める。また、履修要件600点の英語科目の履修後、合格点を取得した学生には、仮にその TOEIC 試験スコアが650点に達していない場合であっても次の学期に履修要件650点の英語科目の履修を認める。

提案2. 学生のライティング技能、スピーキング技能の向上を目的として、TOEIC 試験スコアを用いない英語科目の単位取得状況に基づくAとBによる履修を認める。

A. (ライティング系科目)「ベーシック・ライティング」(必修), 「エッセイ・ライティング」(500点), 「イングリッシュ・セミナー」(550点)の単位取得者には、「アカデミック・ライティング」(650点)の履修を認める。

B. (スピーキング系科目)「ベーシック・スピーチ」(500点), 「ベーシック・ディベート」(550点), 「通訳I」(550点), 「時事英語」(600点)の単位履修者には、「通訳II」(700点)の履修を認める。

本学で実施している TOEIC 試験は、リスニング問題、リーディング問題から成り立っている。TOEFL 試験は、TOEIC 試験と同様に ETS が研究開発している試験で、リスニング問題とリー

ディング問題に加えて、スピーキング問題とライティング問題の4技能試験となっている。上記提案は、本学学生の全般的な英語運用能力向上をはかるとともに、より多くの英語科目の履修を通して TOEIC 試験で高得点を狙うことのできる英語力をつけることを意図したものである。

2007年から、新たに TOEIC IP スピーキング試験、ライティング試験が開始された。本学科では、2008年度中に本学科学生（TOEIC 試験スコア600点前後）を対象としてこれら2つの新試験を実施予定である。また、本学 CALL 教室を公式会場として、TOEFL iBT 試験を実施する準備も平行して進行中である。新しく TOEIC スピーキング試験と TOEIC ライティング試験が受験可能となること、海外の英語圏の大学で学ぶことを希望する学生に科される英語能力試験のうち、最も知られている TOEFL 試験が学内で受験可能であることなどは、高度な英語力の取得を希望する本学学生たちに新たな目標となり、提案2による「アカデミック・ライティング」、「通訳II」の履修希望者数は拡大するであろう。

7. 終わりに

TOEIC IP 試験成績、本学科学生の英語科目取得単位数や履修状況を軸にして、シーボルト英語の現状と課題について検討した。現行英語カリキュラム策定時に想定された学生の英語力到達目標に少しでも近づくためには、今後ますます学生の自律的な英語学習と英語担当教員の積極的な支援が不可欠となる。

なお、本稿をまとめるに当たっては、学生支援課から履修関係の資料、国際交流センター外国語教育オフィスから TOEIC IP 試験データベースに基づく資料の提供を受けた。最後となったが、謝意を表したい。ただし、本稿は国際交流学科あるいは英語担当教員グループの見解ではなくて、あくまでも執筆者個人の見解をまとめたものであることを付記しておく。

注

- 1) 本学科では、1年次4月から3年次8月までの本学科学生の TOEIC IP 試験スコアをデータベース化しているが、本稿では他大学における全学教育時期である1年次のスコアを中心に論じる。
- 2) 実際の科目履修時には、「英検2級合格」または「TOEFL iBT 51～60点」は、「TOEIC スコア500点」相当として取り扱われている。
- 3) TOEIC IP 試験3回以外に、本学では TOEIC 公式試験を2回実施している。学生の多くは3年終了時までスコア500点以上を取得している。このスコアに到達できない学生については、CALL 教材（「ALC 英文法」「NetAcademy Superstandard 2 コース」）を用いた自習や課外講座「レメディアル・クラス」（0単位）の履修を推奨するとともに、「特例措置」をもうけて卒業必修科目「リーディングI」や「リーディングII」の履修機会をもうけている。2008年度4月時点で、4年次在籍者（2005年度入学者）の約1割は、「特例措置」による英語単位取得を希望している。
- 4) 2008年度入学者から、132単位。
- 5) 日本人の英語力の目安を論じた上村(2007)では、大規模な英語能力試験のうち、英検、TOEFL、IELTS について言及するとともに、欧州会議参加国によって策定された外国語学習基準「ヨーロッパ言語共通参照枠」(Common European Framework Reference, 略称 CEFR) について考察している。

参 照 文 献

- 長崎県立大学(2005)「長崎県公立大学法人の中期計画」長崎：長崎県立大学
<http://sun.ac.jp/corporation/medium/pdf/keikaku.pdf>
- 文部科学省(2003)『「英語が使える日本人」の育成のための行動計画』東京：文部科学省
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/15/03/03033102.pdf
- (2008)「平成19年度小学校英語活動実施状況調査及び英語教育改善実施状況調査（中学校・高等学校）について」東京：文部科学省
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/20/03/08031920.htm
 英語教育改善実施状況調査結果概要（中学校）東京：文部科学省
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/20/03/08031920/004.htm
 英語教育改善実施状況調査結果概要（高等学校）東京：文部科学省
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/20/03/08031920/006.htm
- 上村俊彦(2007)「次の英語と日本人英語学習者」県立長崎シーボルト大学国際情報学部紀要 第8号 長崎：県立長崎シーボルト大学
- 財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会 TOEIC 運営協会 (2007)「TOEIC テストと TOEIC スピーキングテスト/ライティングテストのスコア比較表」東京：国際ビジネスコミュニケーション協会 TOEIC 運営協会
- (2008a) 「TOEIC テスト Data & Analysis 2007」東京：国際ビジネスコミュニケーション協会 TOEIC 運営協会
- (2008b)「ETS TOEIC公開データ・資料 スコア分布詳細 140回(2008年7月)」東京：国際ビジネスコミュニケーション協会 TOEIC 運営協会
http://www.toEIC.or.jp/toEIC/data/data_dist01.html?score_id=0000000039

Appendix：英語の外部試験による英語力

以下の表4，表5，表6は，それぞれ，2007年度に中学3年，高等学校3年に在籍した学生の英語力，中学・高校の英語教員の英語力を，文部科学省が行った調査，「平成19年度小学校英語活動実施状況調査及び英語教育改善実施状況調査（中学校・高等学校）について」の調査報告から引用したものである。

表4. 中学3年生の英語力（英検3級以上）

中学3年在籍者数 (A)	3級以上の学生数 (B)	3級相当の学生数 (C)	(B)+(C)	(B)+(C)/ (A)(%)
1,099,792	201,624	154,387	356,011	32.4

表 5. 高等学校 3 年生の英語力 (英検準 2 級以上)

	高校 3 年 在籍者数(A)	準 2 級以 上の学生 数(B)	準 2 級相 当の学生 数(C)	(B) + (C)	(B) + (C) / (A)(%)
(1) 国際関係 (語学含む) の 学科・コース	19,289	9,430	3,571	13,001	67.4
(2) その他の学 科・コース	726,727	70,547	142,363	212,910	29.3

表 6. 英語の外部試験による中学・高校の英語教員の英語力*

	調査対象 者 (A)	受験者数 (B)	目標到達 者数(C)	C/A (%)	C/B (%)
中学英語教員	23,562	14,585	6,271	26.6	43.0
高校英語教員	18,796	12,156	9,508	50.6	78.2

* 実用英語技能検定試験 (英検) 準 1 級以上, TOEFL(PBT 550点以上, CBT 213点以上, または TOEIC (730点以上)